

マルコによる福音書 14 章 53 節～65 節

2018 年 11 月 29 日

古本 靖久

1、聖歌 133 番 「イエスは閉じたる」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 93 ページ）

4、テキストの位置

前回、イエス様はついに逮捕されます。そして弟子たちは皆、イエス様から離れていきます。

イエス様は大祭司の元に連れて来られ、そこで裁判がおこなわれます。その裁判はどのようなものだったのでしょうか。そしてイエス様はどのような行動をおこされたのでしょうか。

水曜日	14:1-2	イエス殺害計画
	14:3-9	埋葬準備
	14:10-11	ユダの思い
木曜日	14:12-16	過越の準備
	14:17-21	主の晩餐
	14:22-26	最初の聖餐式
	14:27-31	ペトロの裏切り予告
	14:32-42	ゲツセマネでの祈り
	14:43-52	イエスの逮捕
	14:53-65	イエスの裁判
	14:66-72	ペトロの否認

5、節ごとに

◆ イエスの裁判

14:53 （そして）人々（彼ら）は、イエスを大祭司のところ（もと）へ連れて行った。（そして）祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た（る）。

逮捕されたイエス様は、大祭司のもとに連れて来られます。マタイ福音書によると、この当時の大祭司はカイアファという人物だったそうです。

そしてそこには、祭司長、長老、律法学者たちが集まってきます。彼らはイエス様の敵対者として登場してきました（14 章 43 節）。またイエス様の受難予告の中にも出てきます（8 章 31 節、10 章 33 節）。彼らはイエス様の裁判に深く関わっていきます。

14:54 (そして) ペトロは遠く離れて(から) イエス(彼)に従い(って来て)、大祭司の屋敷の中庭(の中に)まで入って、(そして) 下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。

さらに、イエス様が逮捕されたときに逃げ出したはずのペトロが登場します。しかし彼はイエス様から遠く離れていました。この姿は弟子としての忠誠をすっかり失ってはいないけれども近づけない、そのような彼の弱さを描きます。

ペトロはどうしてイエス様の後を追ったのでしょうか。ずっと一緒に歩んできた師を見捨てることができなかつたのでしょうか。それとも弟子たちのことは見逃して欲しいと、大祭司に頼みに来たのでしょうか。真相はわかりません。舞台は再びイエス様にスポットライトを浴びせます。

14:55 祭司長たちと最高法院の全員(全体)は、(イエスを)死刑にするためイエス(彼)にとって不利な証言を求めたが、得られ(見つから)なかつた。

最高法院(サンヘドリン)は71人で構成され、少なくとも23人の賛成がなければ死刑のような重大な決定はおこなえませんでした。しかし神殿のソロモンの廊にあった最高法院の議場に入るための門は、夜間は閉ざされていたはずで

したがってこの裁判は、正規のものではなかつたのではないかと見られています。その理由は他にもあります。死刑が問題になっている裁判では、被告の弁護がまず述べられなければならない。死刑に関わる裁判は、夜間に開催してはならない。判決の確認を取るために翌日に二回目の公判が必要である。それらの決まりを、イエス様の裁判では何一つ守っていません。それほどイエス様を死刑にしたいという気持ちが強かつたのでしょうか。

14:56 (というのは)多くの者がイエス(彼)に(対して)不利な偽(の)証(言)をしたが、その証言は食い違っていた(一致しなかつた)からである。

ユダヤの裁判では、二人以上の証言がなければ死刑を言い渡してはならないことになっていました。それは民数記35章30節にも定められています。

人を殺した者については、必ず複数の証人の証言を得たうえで、その殺害者を処刑しなければならない。しかし、一人の証人の証言のみで人を死に至らせてはならない。

彼らはここだけは律法に忠実だったようです。

14:57 すると(そして)、数人の者が立ち上がって、イエス(彼)に(対して)不利な偽(の)証(言)をした。

それでも祭司長たちは、懸命に証言を求めます。何が何でもイエス様を有罪にしたいのです。マルコ福音書は何度も(3章6節、11章18節、12章12節、14章1節)、祭司長や長老、律法学者たちがイエス様に殺意を抱いた場面を報告しました。彼らの怒りは、それほどすさまじかったのです。



14:58 「(わたしたちは) この男が、『わたしは人間の手で造(られ)たこの神殿を打ち倒(壊)し、三日あねば(の内に)、手で造(れ)ない別の神殿を建ててみせる』というのを、わたしたちは聞きました。」

イエス様は確かに13章2節で、神殿の崩壊を予告しています。「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と。

この言葉を初代教会は、自分たちへの約束であると捉えました。つまりユダヤ戦争でエルサレム神殿が破壊され、再建されることはありませんでしたが、イエス様の復活により新しい神殿を与えられるというのです。

例えばコリントの信徒への手紙一3章17節にはこのようにあります。「神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです」。またコリントの信徒への手紙二6章16節にはこうあります。「神の神殿と偶像にどんな一致がありますか。わたしたちは生ける神の神殿なのです。神がこう言われているとおりにです。『わたしは彼らの間に住み、巡り歩く。そして、彼らの神となり、彼らはわたしの民となる』」。

14:59 しかし、この(ような)場合(において)も、彼らの証言は食い違(ちが)った(一致しなかった)。

しかしこの証言も、一致することはありませんでした。イエス様は敵対者の前で、きちんと理解できるようには言われていなかったのかもしれない。

14:60 そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ね（て言っ）た。「（お前は）何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」

複数の人の証言によって、イエス様を死刑へと導くことはできませんでした。それでも大祭司はあきらめません。直接イエス様を尋問します。

14:61 しかし、イエス（彼）は黙り続け（ったまま）何もお答えにならなかった。そこで、重ねて（再び）大祭司は（彼に）尋ね、「お前はほむべき方の子、メシア（キリスト）なのか」と言った。

しかしイエス様は、黙っています。神さまのご意志にご自身を完全に任せられた方に、自分を正当化する言葉は必要なかったのです。このイエス様の沈黙は、以下の旧約聖書の実現を示しています。

わたしの命をねらう者は罌を仕掛けます。わたしに災いを望む者は 欺こう、破滅させよう、と決めて 一日中それを口にしています。わたしの耳は聞こえないかのように 聞こうとしません。口は話せないかのように、開こうとしません。わたしは聞くことのできない者口に抗議する力もない者となりました。（詩編 38 編 13～15 節）

苦役を課せられて、かがみ込み 彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように毛を切る者の前に物を言わない羊のように 彼は口を開かなかった。（イザヤ書 53 章 7 節）

何も答えないイエス様に対し、大祭司はさらに尋ねます。ほむべき方というのは神さまのことです。ユダヤ人は「神の名をみだりに唱えるな」という戒めを守るために、神という言葉色を色々な言葉に置き換えていたようです。またメシアと訳されている語は、ギリシア語でキリストです。

つまりここで、大祭司はイエス様に尋ねているのです。「お前は神の子、キリストか」と。これに対して、イエス様は何と答えられたのでしょうか。



14:62 (そこで) イエスは言われた。「そうです (わたしがそれだ)。あなたたちは、人の子が全能の神 (力ある者) の右に座り、天の雲に囲まれて (と共に) 来るのを見る (だろう)。」

「わたしがそれだ」と訳した言葉は、聖書の中でとても重要な語です。ギリシア語で「エゴー エイミー」、英語にすると「アイ アム」です。たとえば「わたしは羊飼いか、わたしはぶどうの木」という言葉の中に出てきます。また旧約聖書の中で、モーセの前に現われた神さまが名前を尋ねられたときに答えた「わたしはある」も、「アイ アム」なのです。新しい聖書では「わたしはいる」になってしまうそうですが。

つまりイエス様は、自分は神の子であり、救い主キリストであると宣言されたのです。さらに旧約聖書の言葉を用いて、自分こそ待ち望まれていた人の子であると言われます。

わが主に賜った主の御言葉。「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」(詩編 110 編 1 節)

夜の幻をなお見ていると、見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え 彼の支配はとこしえに続き その統治は滅びることがない。(ダニエル書 7 章 13 ~14 節)

14:63 (すると) 大祭司は、(自分の) 衣を引き裂きながら (いて) 言った。「(わたしたちには) これでもまだ証人が必要だろうか。」

大祭司が衣を裂く所作は、元来悲しみの極みを表現していました。しかしこの頃には、神を汚す言葉を聞いたときにおこなうようになっていたようです。

大祭司のこの姿は、周りにいた人たちに大きなインパクトを与えたことでしょう。「あの 大祭司が興奮して衣服を裂く言葉なのだから、よっぽどひどいことに違いない」、人々はそのように思ったのかもしれませんが。

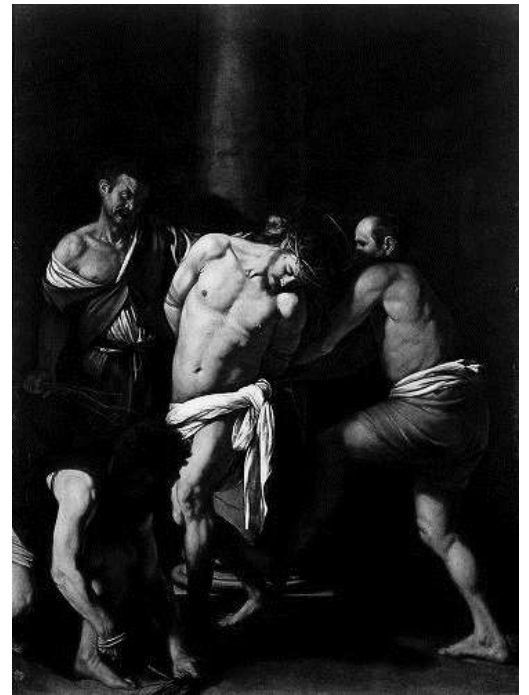
14:64 諸君は (この) 冒瀆の言葉を聞いた。(あなたたちは) どう考えるか。」一同は (彼らは皆)、(彼は) 死刑にすべきだ (死に値する) と決議した。

本当にイエス様の言葉は、冒瀆にあたるのでしょうか。当時の文献では、自分が救い主であると主張することが死に値するような罪であるとは考えられなかったようです。現に何人もの「自称メシア」が現れ、人々をクーデターに導いたという記録があります。しかし人々はイエス様の言葉を冒瀆と捉え、死に値するとしたのです。

14:65 それから（そして）、ある者（たち）はイエス（彼）に唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみろ（預言してみろ）」と言い始めた（った）。また、下役たちは（も）、イエス（彼）を平手で打った。

イザヤ書 50 章 6～7 節には、このような言葉があります。打とうとする者には背中をまかせ ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。主なる神が助けてくださるから わたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っている わたしが辱められることはない、と。

そのイザヤ書の箇所の小見出しには、「主の僕の忍耐」と書かれていました。イエス様は侮辱され、蔑まれながら十字架へと向かっていきます。この様子を、ペトロは遠くから見ていたのでしょうか。



<今日の箇所から>

今回の聖書の学びの中には、旧約聖書の引用が多くみられました。イエス様の受難は、旧約の時代から定められていたことだったのです。つまりそれは、神さまのご計画でした。

イエス様の十字架の意味は、たくさんあります。その一つに、「わたしたちの罪を背負い、いけにえとなる」という考えがあります。屠られる小羊のように、黙って屠り場に行くイエス様の姿を、わたしたちはどのような気持ちで見続けなければならないのでしょうか。

また今日の場面に、たくさんの「敵対者」と呼ばれる人たちが出てきました。祭司長、長老、律法学者たち。そして次はポンティオ・ピラトも登場します。彼らにとって、イエス様は邪魔者でした。どうしても殺さないといけない人物でした。彼らが自分たちの宗教を守り、自分の地位を揺るぎないものにするためには、イエス様がいてはいけなかったのです。

この箇所を読むたびに、わたしは自分が今、どの立場に立っているのか考えてしまいます。敵対者なのか、傍観者なのか、ペトロなのか、イエス様を助けようとしているのか、嘲笑しているのか。そのときにイエス様はわたしをどのような目でご覧になるのだろうかと。

今回の学びはこれで終わります。次回は 12 月 27 日(木)10 時半からです。「ペトロの否認、ピラトの尋問」(マルコ 14 : 66～15 : 5) について学んでいきます。(1 月は 31 日です)